



「一般気象学（第2版補訂版）」

小倉義光 著

東京大学出版会，2016年3月

308頁，2,800円（本体価格）

ISBN 978-4-13-062725-2

本書の最大の特徴は、気象学という学問の基本法則や考え方を丁寧に解説するという編集方針のもと、深からず、浅からず、気象学の全般にわたる分野が網羅されているということで、大学教養課程程度の気象学関連教科の教科書として、まことに適切な書物である。1984年に初版が刊行されて以来、本学会会員の中にも、本書に「お世話になった」方々は多いことと思う。また、1994年から始まった気象予報士試験の「予報業務に関する一般知識」の出題科目は、法規関係を除くと、まさに本書の目次そのものである。適度な難易度の問題であるかどうかを判断するときにも、本書の記述を参考にさせてもらったとの話を試験問題作成者から聞いたことがある。その結果、気象予報士試験の受験者の間では、いつしか「気象予報士試験のバイブル」という本書の呼び方が定着しており、現在でも「バイブル」の地位を保ち続けている。

初版の刊行から15年目の1999年に第2版が出版され、今回、その補訂版が17年ぶりに出版された。30年間以上もトップランナーの地位を保っている訳で、その息の長さに敬服の念を禁じえない。今回の補訂でも目次には変更はなく、以下の構成となっている。

- 第1章 太陽系のなかの地球
- 第2章 大気鉛直構造
- 第3章 大気の熱力学

- 第4章 降水過程
- 第5章 大気における放射
- 第6章 大気の運動
- 第7章 大規模な大気の運動
- 第8章 メソスケールの気象
- 第9章 成層圏と中間圏内の大規模な運動
- 第10章 気候の変動

今回の補訂では、主として、第1章の太陽系惑星に関する箇所、一部、最近の人工衛星による探査で得られた知見についての記述が加えられ、第10章の気候変動の部分では、氷床コアから過去の気温などを解析する手法や、ミランコビッチ仮説に関する部分が前よりも丁寧に記述され、氷期の中で急激な温暖化と緩やかな寒冷化が起こったといった旧版にはなかった知見が紹介されている。地球温暖化問題に関する部分は、旧版はIPCCの第2次評価報告書（1995年）を元とした記述が中心であったが、本補訂版では第5次評価報告書（AR5：2014年）を元に記述されている。いろいろと話題になった「ハイエイタス」についても、AR5の記述の範囲で、脚注として触れられている。

全体を通しては、必要最小限の補訂が行われたということで、大きな変更はないが、気象学の世界では追従を許さない名著であるので、まだお読みになったことのない方には、是非、一読をお勧めしたい。また、個人的で不躰な希望を述べさせていただけるならば、最近、観測手段の高度化で研究活動が活発な積乱雲スケールの現象に関する部分を、小倉先生らしい視点でお書きいただき、「改訂第3版」として世に送り出していただければと思う。

（日本気象予報士会 大西晴夫）